

百合ラブスレイヴ

YURI LOVE SLAVE

小説「あらし悠」
鈴音れな
イラスト

委員長だけのわたくし

試し読み版

第一章	委員長の秘密	006
第二章	委員長で遊ぼう	040
第三章	エッチなこといっぱい教えて委員長	091
第四章	いっぱいキスして委員長	144
第五章	聞かせて委員長の本当の声	192
第六章	だって好きだから	236
エピローグ	可愛い奴隷とご主人様と	279

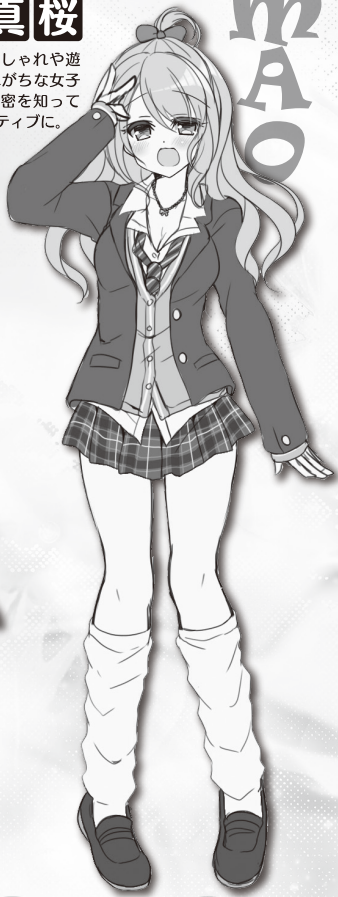
YURI LOVE SLAVE

登場人物
紹介 CHARACTERS

あさ くら ま お
麻倉真桜

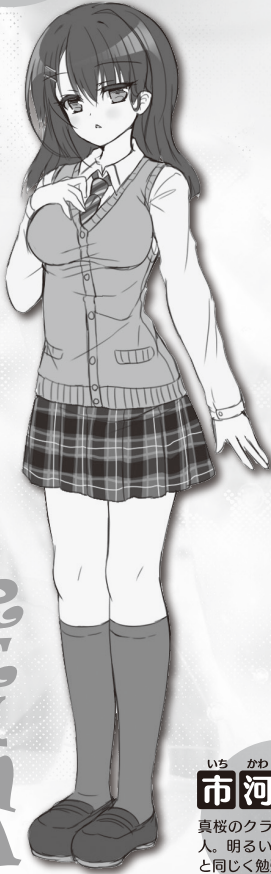
勉強が苦手で、おしゃれや遊ぶ事に気を取られがちな女子校生。委員長の秘密を知ってはからは一気にアクティブに。

MAO



しん じょう れい な
新条怜那

真桜のクラスの委員長。真面目な優等生で普段は無表情。他人と距離を取りがち。



REINA

いち かわ まな み
市河愛実

真桜のクラスメイトで友人。明るい性格で、真桜と同じく勉強が苦手。

にし はし はるか
西端遥

同じく真桜のクラスメイトで友人。3人の中では取りまとめの役も。

ページをうまくめくれず、真桜は、自分が震えているのが分かった。指だけじゃなく、唇も、膝も。興奮しているんだろうか。こんなものを読んで。泳いだ視線が傍らに立つ少女の姿を捉え、うろたえる。内容に没頭するあまり、怜那の存在を完全に忘れていた。

（やだ……あたし、つい夢中になって……。馬鹿にされる……!）

と思っただけれど、彼女もそれどころじゃなかった。それはそうだろう。同性のエッチな本を愛好するという、変わった趣味を知られてしまったのだから。膝の上で握った両手は真桜の比ではないほど震えているし、こちらを直視できないのか、真つ赤に染まった顔を背けている。こんな恥辱を受けたら、普通なら明日から学園に来られない。

ここは、気を利かせて怜那をフォローするべき場面、なのだろうけど、初めて触れる世界に混乱するばかりで、あいにく、真桜にもそんな余裕はなかった。

「ねえ……これってエロ本でしょ？ 学生が買ってもいいの？」

「ち……違うわ！ これはエロ本じゃなくて、健全な百合漫画よ！ 18禁マークがないでしょ！ 成人指定のやつじゃないから、大丈夫なの！」

「え、ああ……そう？ そういうものなんだ」

無神経な質問に、羞恥と怒りが入り混じった顔で怜那が食ってかかる。正直、なんのこどやら真桜にはよく分からなかったけど、彼女には重要なことらしく、恨みがましい視線でこちらを睨みつけている。涙目で頬を膨らませ、恥ずかしそうに腿をモジモジさせて、まるで、小さい子供が意地悪されて泣くのを我慢しているみたいだ。

(そういえば……こんな感情的な委員長、初めてかも)

普段とのギャップに、ちよつとだけ微笑ましくなり、怜那の顔をまじまじと眺める。彼女は鼻息荒く説明したことが恥ずかしくなったのか、唇を噛んで俯いてしまった。

ともかく委員長が大丈夫と言うならそうなんだろうと理解して、真桜は、再び開いた漫画に顔を伏せた。

絡み合う唇。糸を引く唾液。ピンと立った乳首と、そこを這う舌。なにより真桜の眼を釘づけにしたのは、股間を舐められ悶える少女の姿。

「うわ、すご……。こんなとこまで？ へええ……」

「ちよ……ちよつと！ ……変な声出さないでよっ」

「あ、ごめん」

怜那の焦り気味の苦情も上の空。そんなことよりも、真桜は身体に生じ始めた異変に気を取られていた。

(なんだろ……すつごく、ムズムズする……)

お腹が熱い。脚の間が疼く。まるで自分のあそこが触れられているみたいで、無意識に太腿を擦り合わせてしまう。これは、時々オナニーしたくなる時の感覚に似ている。でもこんなに強烈な疼きは感じたことがない。それに、いくらエッチでも、同性を描いた漫画で興奮なんてするはずがない。

膝から力が抜け、いつの間にかドアに背中を預けていた。発熱したように頭がぼんやり

して、股間の疼きを我慢するのが辛い。

ふと見た怜那は、相変わらず顔を横に向けていた。秘密の趣味を暴露された辱めに、懸命に耐えている。緊張で唇が乾いたんだろうか、舌をチロリと覗かせた。そのピンクの濡れ色が、漫画と現実の境界を曖昧にさせる。

「……こういうのって、本当に気持ちいいのかな？」

怜那が怪訝そうに顔を上げる。真桜は、ページを開いてみせた。そこは、少女が恋人に女性器を舐められている場面。身悶えしながら気持ちよさそうに喘いでいる。

「し……知らないわよ！　こんなところで見せないで！」

「こういう本が好きなのに、委員長は経験ないの？」

真桜の質問に、彼女の吊り目が、飛び出さんばかりに真ん丸になった。

「ないわよっ！　……あるわけないでしょっ」

思わず大きくなった声を慌てて抑える怜那。怒るのか、それとも恥ずかしがる場面なのか、混乱した彼女の口元は、ふにゃふにゃと定まらない。真桜だって、自分が突拍子もないことを言っている自覚はある。けれど、なぜかまるで現実感がなかった。ふわふわとした意識の中、抑制が、常識が、緩やかに溶けていく。

本に描かれた行為や快感は、真桜にとって未知の世界。女の子の喘ぐ姿を見ているうちに、なんだか、それがとても魅惑的に見えてきた。

これはフィクション。現実とは違うし、一緒にしてはいけない。分かっているのに、想

像が際限なく膨らんで、そんな建前は意味を失う。

「ね、委員長。……あたし、試してみたい」

まるで自分の口ではないように、言葉が勝手に零れ落ちた。

「試すって……なにを？」

掠れた真桜の声に、怜那が怪訝そうな顔を上げる。

「あたしのここ……舐めてみて」

「怜那が、あんぐりと口を開けた。驚いたのは彼女だけじゃない。真桜自身も「あたし、なにを言ってるの〜!」と頭の片隅で焦りまくる。けれど理性の声はどこか遠く、なにかに取り憑かれたように、右手の指が、太腿をなぞるようにスカートをたくし上げる。」

「麻倉さ……!」

止めようとした怜那が、息を飲んだ。それだけで分かる。薄桃色の下着が、逆三角形の頂点が露わになって、彼女の眼に晒されたことを。

学園は女子校だし、下着姿を見られるなんて珍しくもない。なのに今は、まるで視線が突き刺さるみたいに、身体を中心にピリピリ痺れる。自分でスカートをめくったくせに、堪らない羞恥に襲われ身を振る。

(え、ウソ……)

そのわずかな動きが、真桜に下着の内側で起きていた異変を知らせた。

濡れている。布地の底が、しっとりしている。その湿り気の正体を瞬時に悟った。自慰

の時に性器を濡らす、あの粘液。そして、そんな欲情液を漏らしている部分を、ほとんど話もしないクラスメイトに見せつけているという信じがたい事実が、羞恥の熱となって身体を一気に燃え上がらせる。

「ば……馬鹿！ なにしてるの!? 早くしまいなさい!!」

慌てふためいた怜那が両手で顔を覆う。真核だって、今の自分がまともだとは思っていない。ただ、ほんのちよつと、一度でいいから、実際の快感を体験してみたいだけ。もちろん死ぬほど恥ずかしい。やめるなら今のうち。

でも、その判断をするには遅すぎた。

(……こんな格好までして、今さら引き返せないよ!)

理性と羞恥と欲求の均衡が崩れる。熱病のように頭が呆けて、自分の行為の異常さに目隠しをする。ふっと一瞬意識が遠のき、まるで別人格が現れたように、意地悪なセリフが口を突く。

「早くするのは委員長の方だよ。でないと……こんな本を買ってたこと、クラスのみんなに言いふらしちゃうから」

「そんな……卑怯よ!」

ゾクゾクとした。怜那の震える声に。愕然とした顔に。いつもツンと澄ました委員長が困っているのが面白くて、もっと苛めたい気持ちちが鳥肌のように全身を沸き立たせる。

しかも動揺した彼女は、今さらになつて言い訳を始めた。

「そ……ッ、その本は、その……そう、兄に頼まれて……！」

「あれ？ 委員長って一人っ子だったよね」

もちろん怜那の家族構成なんて知らない。カマをかけただけ。すると正直なことに、彼女は悔しそうに唇を噛んだ。あまりの分かりやすさに、真桜はわざとらしく意地の悪い笑みを浮かべると、広げた本を彼女の顔の前でひらひら振って見せつけた。

「あれあれえ？ 委員長のくせに嘘ついちゃうんだあ。それにさ、仮に本当にお兄さんのだとしたって、普通は妹にこんな面白い物頼まないでしょ。作り話するなら、もうちよつと頭使わなくちゃ」

真桜ごときに馬鹿にされ、優等生の委員長は耐えがたい屈辱感に顔を歪めた。美人が台無しになっっているのが、なんだか妙に興奮する。

——なんとかして、あの無表情女の弱みを。

親友の言葉が、まるで催眠術のように頭の中で幾重にも反響する。自分がそれを見つけた。秘密を知った。委員長の運命を自分が握っている。優越感と征服欲と、そして、もつと彼女を苛めてみたいという歪んだ欲求が、真桜の羞恥を薄れさせた。

「ね、早く……」

自分でも頭が蕩けてしまいそうな甘い声で、下着の底をずらした。布地に隠されていた秘密が、外の空気に触れる。どうかしていると、自分で自分を非難する声が頭の中で何度も何度も響き渡るけど、そんなもの、快感への衝動の前には無力。

扉にもたれて脚を広げると、恥唇の溝が、わずかに口を開いた。それを見せつけられている怜那も冷静さを失って、どうすればいいのか判断できずに、両手で口を覆って肩を震わせるだけ。

「ほらほら。秘密をばらされてもいいの？」

一向に動こうとしない彼女を急かす。今度は本気の脅し。脈打つように大きくなる身体の疼きに苛まれ、相手を氣遣う余裕なんてひと欠片もない。

怜那の呼吸が荒くなった。本当にするのかと、目線で尋ねてくる。しかし、その怯えた色は、むしろ真桜の嗜虐心を昂ぶらせるだけ。彼女の問いへの答えとして、さらに脚を広げて要求する。それで逃げられないと悟った委員長は、覚悟を決めた——というよりも、抵抗する氣力を失ったように、床に跪いた。

指が、脚に触れた。それだけで肌が甘く痺れる。ほんの数ミリだけ伸ばされた怜那の舌に期待が高まる。早く早くと氣持ちが逸る。見上げる彼女の眼が止めてくれることを期待して、しかし真桜にその氣がないと悟ると、まるで現実から逃れるように目蓋を閉じた。そして次の瞬間——。

「はッ……あぁうっ!？」

頭が仰け反った。思わず鋭い悲鳴を上げてしまい、反射的に自分の手で口を塞ぐ。陰唇を、弾力のあるなにかが掠める。触ったというほどの確かな感触もないのに、鮮烈な電流が頭のとっぺんまで一気に駆け上がる。

(な、なに今の……ふ、あ……ッ！)

ひと舐めして抵抗感が薄まったのか、今度は、しっかりと舌が押し当てられた。最初の衝撃から回復する暇もなく、恥裂をなぞり上げられる。

「ヒッ！ あう……あつ!!」

舌の動きに合わせるように腰が跳ねる。声が漏れる。真桜は唇を噛み締め、ポケットからハンカチを取り出すと、震える手でそれを口に咥えた。でも、こんなもので効果があるとは思えないほど、短く甲高い悲鳴が喉から迸る。

「んぐっ……むッ、むふ……んむう！」

くぐもった声が狭い個室で反響した。もし隣に人がいて、聞かれたり覗かれたりしたらなんて焦りや恐怖が頭をよぎるけど、そんなもの、浮かぶそばから押し流される。

(だって……だって、これ………すっごく気持ちいいっ!!)

漫画に描かれていたような、うっとりとした喘ぎじゃ済まない。たまに気まぐれでするおぎなりの自慰とも、まったくの別次元だった。指とは違う柔らかな舌先が、秘裂の襷をくすぐる。それだけで、鋭い快感が静電気のように腰を痺れさせる。

怜那の舌愛撫は、チロチロと軽く触れるだけの、思いきりの足りない遠慮がちなもの。それでも、初めて他人から愛撫を受ける真桜には堪らない刺激だった。

「ふ、む……ちゆる、ちゆ、ん」

「い、委員長ちよ……それ、くふうんっ」

苦しそうな鼻息が下腹部に当たってこそばゆい。十分すぎるほど気持ちいい。

(でも、でも……)

なんだか、物足りなくなってきた。舐めてもらえるのは表面ばかりで、淫裂の深い部分に不満が溜まる。気持ちよさは感じているのに、さらなる快感を求め始めた途端、躊躇気味な舌の動きが、なんだかともつてもじれたい。

「もつと……もつと、強く……んあつ、いっぱい……っ」

要求は、通じなかった。大声は出せないし、ハンカチを咥えているので籠ってしまふ。それに、怜那も必死だった。太腿に食い込む彼女の指に、緊迫感がみなぎっている。

冷静に考えれば、脅迫され、無理矢理にこんな真似をさせられて、相手を気持ちよくさせようなんて気になるはずがない。けれど自分のことだけで頭がいっぱいになっている今の真桜に、彼女の都合なんて考えられなかった。

「もつと奥まで、もつとお！ でないと……あたし、ホントに明日、みんなに……」

「ンッ……むうう！」

脅しの追い打ちが効いた。怜那の舌が陰唇の襞を搔き分け、粘膜にまで到達する。

「はうッ、ンあつ!!」

お尻がキュッと強張った。腰が引けて爪先立ちになる。そこは、なんだかデリケートそうに触るのが怖くて、数回しかないオナニー経験の中でも、ほとんど未知と言っていい領域。でも彼女の舌の柔らかさが、そのためらいを取り払った。底の方まで招き入れると、

痺れるような、それでいて蕩けるような不可解な快感が、真桜を激しく翻弄する。

「すご……！ それ……すごい……っ！」

過敏な反応を見せて気持ちよさを伝えると、奮起したのか、それとも腹が立ったのか、怜那の動きが大胆になった。舌先を素早く振動させ、粘膜を擦り上げる。

「ふむ、む、むうん、むううっ！」

ハンカチを噛んでいるのに、喘ぎ声が抑えられない。膝もガクガク大きく震える。さつき漫画を読んだ時も緊張で指が震えたけれど、それとはまったく異質な感覚で、まるで感電したように手足が強張っている。

（気持ちいいって……こ、怖い……！）

しかも、舌が一定のリズムを刻み始めた。愛撫の経験なんてないと言っていた怜那だけど、さすがにエッチな本を読んでいるだけのことはある。テクニクは皆無でも、それを知識で補い、強弱をつけた動きで真桜を責め立てる。

「ちゅ、ちゅ、れるれる、ちゅっ」

「んあっ！ あ、あ、はああ……あ、あ、ああ……」

卑猥なキスに昂ぶって、全身の力がコントロールできない。左手に持った本を何度も落としてそうになり、必死になって胸に抱える。無意識のうちに広げた左脚を、怜那の肩に乗せていた。その脚で彼女を抱き寄せ、自分の身体の奥へ奥へと舌をいざなう。しかしわずかに抵抗を感じたので、右手も使って頭を押さえ込んだ。

「ん——ンッ！」

それでも小さく呻いて抗う怜那の肩を、本の背表紙で軽く叩いた。自分の立場を思い出した彼女は、ひと呼吸置いてから、思いきり舌を捻じ込んだ。

「ちよ、ま……委員長待つて……そんな急に……ンあつ、あ、ンふあつ！」

自分から要求しておきながら、真桜は強烈な刺激に音を上上げた。それになんだか、妙に粘り気のある水音が、彼女の口元から聞こえてきた。ぴちゃぴちゃくちゅくちゅと、不快と紙一重の卑猥な響きが。

(違う、これって……！)

音源は、怜那じゃなくて、真桜。淫裂から溢れる愛液を舐め取られている音だ。それに気づいたら、顔が燃えるように熱くなった。単なる好奇心だったのに、同性の愛撫でここまで身体が反応しているなんて。それ自体も驚きだけど、そんなことより、濡れていることを彼女に知られていることが、ものすごく恥ずかしい。秘部を晒しておいて今さらなにをとは思っても、聞いたことのない自分の音が、羞恥と後悔で真桜の胸を締めつける。

「む、うううん！ ひあ、いやいや、いやああん！」

両手はそれぞれ用事があつて、耳を塞ぐこともできない。粘着質の水音に頭の中まで嬲られて、上下左右に髪を振り乱す。そんな真桜の都合など知る由もない怜那は、こんな恥辱の時間を一刻も早く終わらせようとしてか、さらに舐めやすくなるように、淫裂を大きく広げた。



「あ、麻倉さんっ。これが、言うことを聞かせたいこと……ンあ！」

「麻倉さん、じゃないでしょ。真桜って呼びなさいよ。それに、こんなのはまだ命令じゃないよ。本番はこれからなんだから」

シャツの中に手を入れて、今度はブラの上から乱暴に揉みしだく。本当なら、この掌に収まりきらない豊かな乳房を、もっと楽しみたい。拙いながらも、自分の愛撫で気持ちよくさせてあげたかった。なのに、そんな気持ちを蹴散らして、お仕置きの苦痛を与える。

「ねえ、怜那。忘れちゃ駄目でしょう。あなたは、あたしのものなんだから」

「え……？ え？」

顔を近づけ囁くと、彼女が、困惑の目で見上げてきた。そんな約束なんかしていないと言いたげに。もちろん真桜にも覚えはない。だけど、そんなのどっちだってよかった。今ここで宣言したのだから同じこと。またも勝手な理屈を暴走させ、でも、胸の奥に釈然としない思いが積もっていった。

どうしてこんなに腹を立てているんだろう。苛立ちの原因が、自分でも分からない。

(そんなの知らない。関係ない)

答えが出る気配もないのに、考えるだけ時間の無駄。そんなことより、したいことを優先すべき。強引にそう結論づけた真桜は、彼女をキャスター付きの椅子に座らせた。肩を掴んで真っ直ぐ見詰める。視界の端に、細い喉が唾液を飲み込むように動くのが見えた。それに釣られて真桜も喉を鳴らし、硬い声で宣告する。

「怜那……………おっぱい、見せてもらうね」

「お……………おっぱい!？」

聞き返す怜那の左乳房を、下からそつと、掌で掬い上げる。形と重さを確かめるように指で揉むと、彼女は「ん…………ツ」と呻きながら目を閉じる。でも、真桜がシャツの裾に手をかけると、息を飲んで目を見開いた。もちろん逆らうのは許さない。辱めを与えるように、わざとゆつくり、めくり上げる。

「ん、あ……………あつ」「はあ……………」

怜那の強張る声と、真桜の溜め息が重なった。無駄なお肉のまったくない、白くて滑らかなお腹が、呼吸と一緒にピクピク引き攣る。彼女は歯を食い縛り、身体の横で両手を握って羞恥に耐える。

「どうしたの？ この前なんか、もつと恥ずかしいところを見せてくれたでしょ？」

「そ、それとこれとは……………恥ずかしいものは恥ずかしい……………のっ」

怜那の声が、凍えるように震える。そういう真桜の声も上擦っていた。勢い任せに脱がせてしまえばよかつたと、心の中で後悔する。まるで、初めて恋人の裸を見るような、妙な緊張感が二人の間に張り詰める。真桜は息を止めてそれに抗い、シャツと、そして飾り気のない簡素なブラを、剥ぐように肌から離した。

「や……………やっぱ駄目——!」

最後の瞬間の抵抗は、タッチの差で間に合わなかった。怜那がシャツを戻そうとするよ

り早く乳房が飛び出し、先端がぶるんと跳ねる。その桃色の残像に惑わされた真桜は、考えるよりも先にぱくりと食いついた。

「ひあん！」

怜那の声が裏返る。可愛い音色に刺激され、口に含んだ乳首を思いきり吸い込んだ。

「や、や……ん、くっ！」

痛かったのか、怜那の両手が肩にしがみついてきた。食い込む指の感触で、少しだけ我に返る。さつきから、彼女を痛めつけてばかり。

(あたし、今日はなんか変だ。怜那は悪くないのに)

真桜が怒らなければならぬような粗相なんて、なにもしていない。なのに無性に腹が立って、心穏やかでいられない。

「……ん！」

怜那が喘ぎながら身悶えする。考え事をしている間、真桜は無意識に、彼女の乳首を鉛玉のように舌の上で転がしていた。おかげで、最初は柔らかかった肉蕾も、すっかり硬くなっている。

(これって、興奮してるってこと?)

上目遣いで、表情を覗き見る。恥辱や苦痛に耐えるように目を閉じてはいるけれど、嘔み締めた唇は開閉を繰り返し、そのたびに小さな吐息を漏らす。上気した肌を見ても間違いない。感じている。そう思った途端に胸が弾んだ。もつと喘がせてみたいと、今度は意

識的に、細かい動きの舌先で、何度も乳首を弾き飛ばす。

「んあ……あつ！　そ、そんなことしちゃ、それ……だめっ。やめ……あんツ！」

彼女は真桜の肩に手を置き、でも押し返そうか逆らうまいか迷って、身体を振るだけしかできないでいた。それをいいことに、真桜は細い腰を抱き寄せて、乳輪ごと頬張った。お尻が激しく暴れ、真桜に掴まっついていないと今にも椅子から落ちそうだ。

「あ、麻倉さん……！」

「真桜、だつてば。……コリッ」

覚えの悪い飼犬を甘噛みで躡ける。彼女の身体が、伸び上がるように跳ねる。

「ひあん！　ま、真桜……。ど、どこでこんなの覚えて……」

「んー？　ちゅ。そんなの……ちゅっ。怜那のエッチな本に決まって……ちゅば、コリ、ちゅるちゅる、ちゅるんっ」

「やだ……そんなこと言わないで……あ……あああうっ」

成績優秀な委員長のくせに、こんな簡単な問題の答えも予想できなかったなんて情けない。罰として、さつきから鼻孔を刺激しているものに言及することにする。

「はあ……。怜那の汗の匂い……」

胸の深い谷間に顔を埋め、うっとり呟く。彼女の身体が固まった。乳首責めの羞恥に気を取られ、さつきのバレーボールで大量に汗を流したことを忘れていたらしい。実際にはほとんど乾いていて、匂いらしい匂いはない。それでも、仄かな残り香に小鼻を動かすと、

彼女の顔が真っ赤に染まった。

「ダメダメダメ！ そんなの嗅いじや駄目ええええ！」

「そんな大声出すと、下にいるみんなに聞かれちゃうよ」

「で、でもっ……やっぱ駄目！ もうおしまいっ！」

完全に冷静さを失い、シャツを下ろして胸を隠そうとする怜那。プレイを続けたい真桜と軽く揉み合いになる。

「ちよ、怜那っ。そんな暴れたら……！」 「きゃあ!!」

急に立ち上がった怜那が足を滑らせた。身体が後ろに倒れ込む。真桜は慌てて腕を伸ばし、床に打ちそうになった彼女の後頭部を両手で庇った。

「危ない……よ？」

囁きながら、真桜は動揺していた。怪我をしそうだったからじゃない。抱き合う格好になった怜那の、柔らかな乳房を感じていたから。体操服を通して、重なり合った胸に、コリコリと硬い乳首の小さな突起を感じる。

ずるずると彼女の身体の上を滑り、今度はじつくりと、膨らみを観察した。仰向けになって少し潰れてはいるものの、小山のように盛り上がる半球型の乳房。その頂点には、親指と人差し指で円を作ったくらい乳輪。そして、小粒ながら充血したように真っ赤な乳首が、ツンと上を向いて立ち上がる。

「綺麗……」

素直な感想が口から漏れた。その瞬間、怜那がどんな顔をしたかは分からない。真桜はそれほど、豊かな軟丘に視線を奪われていた。

「……………馬鹿なこと言わないで……………」

謙遜——ではなく、同性の胸に見惚れているお馬鹿さんへの嫌味だろう。それをあつさり聞き流し、再び口を近づける。なんのためらいもなく、赤く小さな果実を口に含む。舌先に触れると、頭の中を痺れさせるような悦びが走った。吸わずにいられない衝動に駆られ、無心で転がし、舐りまくる。

「はあ……………はああ……………あつ、ちゅッ、ん、む……………ふあ……………ちゅぱっ」

「あッ……………麻……………真桜、真桜っ……………!!」

怜那が真桜の名前を呼びながら身体をくねらせる。彼女が感じているのが嬉しい。でもそれ以上に、唇や舌に触れる感触に、真桜は夢中になっていた。柔らかな乳房と硬い乳首のコントラスト。その境界線を舌先で探って舐める。口の中に唾液が溜まると、それがまるで母乳が溢れてきたような錯覚を起こし、ちゅぱちゅぱと音を立てて吸いまくる。

「あ、そんなに、吸ったら……………ン！ 真桜……………あ、赤ちゃん、みたいよっ」

怜那は皮肉のつもりかもしれないけれど、真桜の耳には褒められているようにしか聞えない。唾液が乳房の丸みに沿って零れ、それを舌で掬って再び乳首に塗りつける。

「ふ……………うんっ、ふあう、ん……………んンッ！」

腰が浮く。床を擦りながら脚が交互に曲げられる。やるせない快感が彼女の身体の中を

駆け巡っているのだと思うだけで、真桜の胸も堪らない歓喜で熱くなる。

「あ、真桜……私……それ、そこ……きゅふん！」

すぐにでも達してしまいそうに、怜那の声が切迫してきた。自分のご主人様なのに、どうして奴隷を気持ちよくしてあげているんだろう。そんな疑問も浮かんだけれど、耳をくすぐる喘ぎ声が可愛くて、愛撫をやめる気になてなれない。

「ふあ、あ、あ……ああ！ あ、あ、あ、あ……！」

彼女の喘ぎが小刻みになる。眼の焦点も、次第に合わなくなってくる。もしかして、本当に胸だけで絶頂するんだらうか。それを確かめたくなつて、舌で弾く速度を上げる。

「怜那、もつと気持ちよくしてあげ……りゅふあ!？」

ところが、彼女はいきなり横にごろんと転がって、ふたりの上下を入れ替えた。そして戸惑う真桜の体操服をめくり上げ、逆襲のように乳首を舐め始める。

「ちよつと怜那、急にどうし……ひいああつ!!」

「ちゅばちゅば、じゅるっ、ちゅ、ちゅばばつ」

最初からトップスピートで乳首を弾かれて、背筋が浮き上がるほどの痺れが走った。思わず奇声を発してしまい、慌てて口をつぐむ。けれども我慢なんてできない。彼女の感じる姿と喘ぎに刺激され、真桜の身体も十分すぎるほど欲情していた。

「ひっ、ひはっ、あ、ん……ふあつ!!」

震える顎を突き上げて、短い喘ぎを漏らしてしまう。乳突起を吸われ、弾かれるたび頭

の中が真っ白になる。噛まれると、痛いのに気持ちいい。もう一方の乳房も乱暴に揉みしだかれていますのに、甘い快感に身悶えさせられる。

「すご……。怜那、お……おっばい、気持ちいい……。いいっ！」

胸がこんなに感じるなんて。しかも彼女は真桜の脚をこじ開け、指先で内腿をくすぐり始めた。スパッツ越しとは思えない快感電流が股間を刺激する。秘裂がねつとりと口を開き、とろりと零れた淫蜜が下着に吸い込まれていく。

「ふあ、あ、やああああ……」

見えない部分の映像さえはつきりと頭に浮かび、羞恥に耐えかねた真桜は、夢中で怜那の頭を抱き寄せた。そんな心とは逆に、身体はもつと快感を貪ろうとして脚を開く。しかも彼女は、その真桜の太腿に、自分の股間を擦りつけていた。

「——!!」

くねくねと波打つ卑猥な腰使い。自分の身体が、彼女のオナニーに使われている。屈辱と、それを遥かに上回る大きな悦びに、真桜の頭も身体も沸き立った。

「怜那……れい、なあっ!!」

名前を呼ぶのに応えるように、乳首を吸われる。スパッツの中心線に沿って、股間を爪で逆撫でされる。凝り固まった乳首と淫核を同時に刺激され、上下で生まれた快感がお腹のあたりで火花を散らす。

「ど……どう真桜……き、気持ちいい？」

「ふあ、あう！ す、すご……すごい……。それ、すごく気持ちいい……。い、あっ！」

勝ち誇ったような怜那の声に素直に答える。こんなに気持ちいいのに、ご主人様のプライドなんて言っていられない。引き返すことのできない快感の高みへ向かって、腰を必死に振り立てる。

「れ、怜那あたし……だめ、駄目になっちゃう！」

「私……も。真桜、私も……！」

余裕を見せたのは一瞬だけ。怜那の声も引き攣っている。真桜もなにかしようとするけど、彼女の愛撫に翻弄されて、しがみつくと以外になにもできない。

「れ……怜那、あたし……イク！」

「イ……イクの真桜？ ふあ！ わ……私、も……もう、ンッ！」

泣きそうな声が重なった。くねる身体を擦り合わせる。彼女の熱い吐息に乳房が包まれる。かと思った瞬間、歯が乳首に食い込んだ。痛みを通り越した快感で、失禁するような熱さが股間に走る。

「ヒッ!? ひあ！ ひつ……いいあああああ!!」

ガクガクと腰が跳ねる。それが太腿に押し当てられた怜那の股間を擦り上げる。

「ふあ！ あ、あう、うあ、あうあう、ふうあああああ!!」

同時に怜那も達してしまった。激しく全身を痙攣させながら、真桜の乳房に指を食い込ませる。その痛みが、さらに高い絶頂へと真桜を跳ね上げる。



バイバイと手を振る。けれど足が動かない。歩き出すと震えているのがバレそうで、転んでしまいそうで、一步も前に進めない。

「じゃっ、帰るから」

今度こそと、息を止めて踏み出す。それを、怜那の声が引き止めた。

「それで、なにを教わりたかったの？」

「え、なにって……？」

「また後からおかしな要求をされたら、その方が面倒くさい。いま教えてあげるから、なにを知りたいのか言いなさい」

真桜は首を傾げた。彼女の口調はいつもと同じで、投げやりになって見えない。ただし、ジロリと怖い目で、早く言えと催促してくる。それに急かさず答えようとして、またも言葉を詰まらせた。

教わりたいことははっきりしている。さっき読んだ漫画にも出ていたクンニ。女性器を口で愛撫する行為。——なのだけだ。

「そ……ッ、そんな恥ずかしいこと、言えるわけないでしょっ！」

真桜の逆ギレに、今度は怜那が怯んで一步下がった。攻守がめまぐるしく交代し、どちらが優位に立っているのか分からない。ともかく、エッチなことなので、言葉にするのはばかられるのは察してくれたみたいだ。

「じゃ、じゃあ……。そうね……。こうしてるから、好きにしなさい」

怜那は困惑気味に部屋を見渡し、ベッドへ仰向けになって寝転んだ。行儀よく、両手を脇に置いた姿勢で目を閉じる。

シヨートパンツから伸びる素足。緩い襟口から覗く華奢な鎖骨。薄く開かれ吐息を漏らす、ピンク色の唇。わずかに頬にかかった髪が、妙に色気を醸し出す。そして、Ｔシャツの布地が形をくつきりと浮かび上がらせる、小山のようなふたつの乳房。悔しいほどスタイルのいい肢体を見下ろし、真桜は小さく唾を飲み込んだ。

(でもこれ……どうすればいいの?)

今までのような勢い任せならともかく、こうも無防備に「さあどうぞ」と身体を投げ出されると、逆に始め方が分からなくなる。

「……………世話の焼ける娘ね」

怜那は、今度は呆れ気味に溜め息を吐き、真桜の手を引つ張った。導かれるまま、彼女の上に身体を重ねる。触れ合った頬が震える。彼女には何度も触れてきたはずなのに、どうしてこんなに緊張しているんだろう。

「ね、ねえ。本当にいいの？」

戸惑う自分を紛らわせようとして囁きかける。すぐく小さな声だったのに、まるで彼女の方が緊張しているようにピクンと身体を強張らせた。そして、自らを落ち着かせようとしてか、長く、深く息を吐く。

「…………構わないわ。どうせ休憩中だったもの」

本当だろうか。真偽を判断できずにいると、不意に下半身が軽く痺れた。

「ひゃん!!」

変な声が漏れた。始めるきっかけを作ろうと、怜那の指がクモのような動きで内腿をくすぐっている。心の準備ができる前に先制攻撃を受けて「ご主人様」のプライドに火が点く。仕返しのつもりで乱暴にTシャツをめくったら、しかし逆に真桜の方が驚かされる羽目になった。いきなり飛び出した生の乳房に目を丸くする。

「え……ノーブラ!! おっぱいの形が崩れちゃうよ?」

「普段はちゃんとしてるわよつ。きよ、今日は、その……」

言いかけて、急に口をつむぐ怜那。その反応と、耳元に直接吹きかけられる吐息がくすぐったくて、想像を様々掻き立てさせる。

「今日は、てことは……もしかして、あたしにエッチなことされるの期待して、準備して待っててくれたの?」

「ちが……っ。そんなわけないでしょ! 間違いよ、不正解!」

「えー?」

ピクピク身を震わせるほど乳首が硬く張り詰めているのに、ムキになって否定するのが怪しい。だとすると、他に考えられることといええば。

「分かった、ひとりエッチしてたんだ!」

瞬間、重なっている彼女の頬がカッと熱くなった。顔を上げて表情を確認すると、真桜

の推理を裏づけするように、眼と唇がわなないている。

「ばば、馬鹿じゃないの？ そ……そ、そんなわけ……」

「じゃあ確かめるね」

彼女の脚の間に素早く顔を移動させる。閉じようとした膝は肩で阻止。しかしショートパンツを脱がせる余裕まではないと判断し、下着とまとめて布地を脇にずらして、恥裂を露出させる。

「きゃあああ！ ば、馬鹿っ。見ないで!!」

馬鹿の自覚はあるので、そんな罵り方で真桜は止められない。それになにより、自由に触っていいと言ったのは怜那の方だ。遠慮なく彼女の腿裏を肩に担ぎ、お尻を浮かせる。そして上向いて見やすくなった性器に鼻を近づけ確かめる。

「くんくん……。やっぱりエッチな匂いがする……。それに、ここ、ぐっしょぐしょ」

「そんなわけないわ！ あなたが電話してきたから、途中でやめ……」

動揺するあまり、彼女は結局、自慰を自白してしまった。今度は、わななくどころか石のように固まって、言い訳の言葉すら出てこない。なにかを懸命に考えているのは左右に泳ぐ眼で分かるけど、思考が空転しているのが傍目にも明らか。

「んふふっ、えいっ」

その隙に、お尻から下着を剥がしてしまう。怜那は完全に反応が遅れ、あつと言う間に下半身は丸裸。Tシャツもめくられて乳房も丸出しなので、ほぼ全裸と言っていい有様に。

おかげで、だいぶ触りやすくなった。

「ばかばかばか！ 真桜のばか……ンッ！」

「んふふつ。馬鹿で結構ですよー………つて、ん？」

もしかして今、彼女は真桜を名前で呼ばなかっただろうか。今までは、さんざん催促しないと言ってくれなかったのに。罵る拍子について、という感じだけど、それも友達としての距離が近くないと出ないわけで、そう思ったら、むしろ嬉しくなった。ただ意地っ張りな彼女のこと。指摘したら確実に否定する。もう二度と呼んでくれないかもしれない。

「な、なによ……」

「なんでもない。んふ、れーいな♪」

弾む気持ちを含み込んで、でも名前で呼び合うことを誘導するように、指先でするりと恥裂を逆撫でした。たったそれだけのことで、彼女の背中が小さく反り返る。

「ああんっ！」

「あは、怜那つてば……。オナニーの途中だけあつて、すつごく感じてるね」

「だ、だから途中なんかじゃ……。ふ、あん、あん、あんっ」

今度は指の腹で淫核を転がす。ひと擦りごとに腰が跳ねながらくねる。さつきまで迷惑をかけたと落ち込んでいたのに、怜那の乱れる姿に胸が熱く弾んで、反省の気持ちなんてどこかに吹き飛んでしまう。

「や、あんっ。んあつ、そこ………は、あ、真桜お………！」

「はあ……はあ……。怜、那あ……」

さらに恥裂に顔を近づけ、瞬きもせず凝視する。濡れ方は、実は、まだそれほどもない。さっきのは怜那を騙す単なるはったり。でも陰唇の内側に潜むサーモンピンクの粘膜は、まるで油を薄く引いたようにテラテラと卑猥に輝いている。そこを指の先端で搔き回すと、外側の褻が、まるで別の生き物のように妖しく蠢く。

「はあ……」

弄りながら、思わず熱い吐息を漏らした。これは怜那の淫部なのに、まるで自分が触られているように、恥ずかしいほどあそこが疼く。無意識にお尻を振って、内腿を擦り合わせる。もちろん、そんなもので刺激が足りるはずがない。下着の中の陰唇が、物足りなさを訴えるようにウズウズと脈打って堪らない。

「……………ん！」

下着と擦れる微弱な快感が、逆に切なさを生んで小さく呻く。早く脱いで、思いきり擦りまくりたい。でも違う。せっかく気持ちよくしてくれる相手がいるのに、自分の指でなんかじゃもつたいたい。

（それに……今日は、今日こそは、やってみたい……）

ぱっくりと口を開く、薄桃色の粘膜。鼻孔をくすぐる甘酸っぱい匂いで、口の中に唾液が溜まる。見ていただけで吸い寄せられそうだ。今なら、そこにキスできそうな気がしていた。無理強いしたとはいえ、怜那は最初から口づけてくれたのだし、自分にできないは

がない。ゆっくりと舌を伸ばし、まずは一度触れてみようとする。

「ん……。ん……………」

けれど、そこまで到達しなかった。キスしてみたい欲求はあるのに、どうしても最後の
一線を踏み越えられない。

どんな味がするのか、淫裂のどこを舐めればいいのか。そもそも自分の愛撫で本当に彼女が気持ちよくなってくれるのか。なにひとつ分からず、自信が持てなかった。未知の経験を前に、不安が胸の中で暗雲のように広がって、実践する勇気を押し込める。

(もうちよつと……………あとちよつと……………)

しかし、秘裂の数センチ手前で、どうしても止まってしまふ。もしかして、自分には無理なんだろうか。なんだか物悲しくなつて、情けない声で彼女を呼ぶ。

「れ、怜那あ……。あたし、どうすればいいのか分からないよお」

「……………もしかして、真桜……………私のそこを？」

涙目で頷くと、怜那は、もう自然に名前前で呼んでいることに気づかず、むしろ愛撫を中断したことに苛立ちながら身体を起こした。その勢いで、真桜をベッドに押し倒す。

「あなたって、本当に学習しないのね。私が何度もお手本を見せてあげたのに、ただアン喘いでいただけなの？」

そして背中を向けてお腹に跨がると、肩越しの見下した眼で、ここぞとばかりに嘲りの言葉を浴びせた。反論しようにも、それは紛れもない事実なので、真桜としては嘲りだろ

うと罵りだろうと甘んじて受け止めるしかない。

「だ、だつてえ……。怜那の舌でペロペロされると、気持ちいいんだもん……」

なんだか甘えたような言い方になってしまった。また馬鹿にされると思ったら、彼女は真つ赤に染まった頬を隠すように、プイッと顔を背けてしまった。

「ば……ばつかじやないの。いい？ こうするの。まったく……指でならできるのに、どうして舌では触れないのかしら。同じようにすればいいのよ」

「う、うん……」

素直に頷き、触れてくるのを待つ。でもその前に、こちらはブレザーさえ脱いでいない完全着衣なのを忘れていた。合図のようにパンツのゴムを引っ張られ、焦り気味にお尻を浮かせる。足首から抜かれる感触に羞恥心を刺激され、秘裂が、まるで自らの姿を隠そうとするように収縮する。しかし次の瞬間には、彼女の指が割れ目を開いてそれを暴いた。

「——んっ！」

小さく息を飲む。見るのはいいけど、自分が凝視されるのは、やっぱり耐えられない。まるで視線が直接触れているかのように、陰唇の縁が敏感にぴりぴり痺れる。逃れようとして腰をくねらせたなら、彼女の身体全部がのし掛かって押さえ込まれた。それと同時に滑らかな舌が、ノックするように秘裂の内側へと分け入っていく。

「んあ！」

内腿が強張った。足指が折りたたまれる。舌が粘膜を舐め上げるたび、甘い痺れが身体

の中心から広がっていく。見られる恥ずかしさは消えないのに、気持ちよさの方が遥かに勝って自然に脚を開いてしまう。

「びちゃびちゃ。ちゆる、ちゆぶちゆぶ、ちゅっ」

「んああうんっ」

じっとしていられずに腰を突き上げると、彼女の唇が吸いついた。まるでディープキスをしているように、首を左右に傾けながら唇と陰唇を絡み合わせる。

「き、気持ちい……は、あつ！ そのチュー、すごっ、ん、くふううんっ」

淫らな口づけに短い喘ぎを漏らしながら、真桜は、頭の片隅でぼんやりと考えた。

(そういえば、キスってしてないな……)

ファーストキスも未経験で、こんなエッチで蕩けるように気持ちのいい体験をしていいんだらうか。そしておのずと、もつと重要なことに思い至る。

(……………怜那は、キス、したことがあるのかな)

堅物だし、無愛想だし、恋愛経験すらあるとは思えない。けれども、エッチな百合好きという意外な素顔を持っていることを考えると、絶対には言いきれない。

ふと、彼女が誰かと口づけているシルエットが頭を掠める。その瞬間、頭にカッと血が昇った。苛立ちのような、焦燥のような、訳も分からず胸が落ち着きをなくす。そして気づけば、目の前で陰唇が息づいている。まるで溜め息を漏らすように綻び、唾液のような蜜で濡れるそれを、滅茶苦茶にしたい衝動に駆られる。

「ん、ちゅ……はあ……。なにしてるの、真桜。だから、喘いでばかりいないで……自分で……ふ、ふああああ!!」

上気した声で咎めていた怜那が、急に鋭い悲鳴を上げた。

「ん、んむ……ん、じゅぷっ」

「ちよ、真桜……ひ、あああっ!」

真桜の舌が、彼女の膣口を突き刺す。今まで躊躇していたのが不思議なくらい、尖らせた舌先を捻じ込み、無我夢中で軟肉を掻き回す。

「ひあ、あ、ふあっ。そんな……急すぎ……あ、あ、んあ!!」

跳ねる怜那のお尻を両手で引き寄せた。舌に吸いつく、粘膜のねっとりとした感触さえ心地よく、愛液が唇に塗りつけられるのも構わず陰唇に唇を絡ませる。

「ふあ……怜那……ん、ちゅ、ちゅば、チュッ」

「ふあ、あ……あ、真桜……!　そこ深い……ん、ふあ……っ」

負けじと、怜那もクンニを再開する。知識と経験の分、彼女の方が的確に感じるポイントを捉える。膣口の縁をなぞり、陰唇を震わせ、クリトリスを転がし、弾く。

「ふああああ……!」

鮮烈な甘電流に貫かれ、全身が硬直した。指先さえまともに動かせなくなるけれど、また悶えるだけなのと嘲られてしまう。快感に流されたいと甘える身体に鞭打ち、懸命に舌を伸ばした。実際に舌で触れてしまえば、あれほど尻込みしていた味も匂いも気にならな

い。それよりも、彼女の反応が、熱い喘ぎが、真桜に喜びを与えていた。

(怜那、あたしの舌で感じてる……)

そう思うだけで胸が幸せいっぱいになって、次々と溢れてくる蜜を、嬉々として舌や唇で受け止める。怜那の動きを懸命にトレースし、硬く尖る淫核を舌で擦り上げる。

「ひっ、あふッ！ だめっ。い、いきなりそこは強すぎい……！」

怜那の腰が、それまでとは段違いの派手さで跳ねた。ここだと思つて集中的に責める。するとさらにお尻が暴れ、口が外れてしまった。無我夢中で両腕と両脚を彼女の身体に絡め、全身を使つてしがみつく。

「怜那、逃げちゃりやめ……ん、ちゅ、じゅる、ちゅば、ちゅる！」

「やあああ！ ね、真桜、別のところをお願い……ねえ真桜っ、ねえ、ああうッ！」

珍しい怜那の懇願が心地よく耳をくすぐる。けれどもあいにく、初めてのクンニに必死な真桜には、彼女の要望を実践する余裕なんてなかった。奇妙な声が出てしまうほど感じてくれているのだと確信し、ひたすらにクリトリスにキスを浴びせる。

「ひっ、ひっ、ひぁッ！ んもう、このバカッ……ん、じゅるう！」

「ふああああ!!」

怜那の逆襲淫核キス。容赦のない吸引に背中がしなる。伸ばしたままの舌と彼女の恥裂が、濃厚な蜜の糸で繋がれる。

「ば、ばか真桜っ。も、もつと優しく……こ、こんな風に……ちゅ、じゅるっ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

夢幻姫姫
S.E.N. コスプレ

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させてあげる
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

フリリダム120%!?
ジャンルにこだわれない
ドキドキ×ラブ！

呪詛喰らい師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？



二次元ぷち文庫



あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍しつこめなエッチノベル！



小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化！



異世界
で生きる
妹は
ウマい？

ドキドキクラブな
ハーレム系
ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

姫騎士 クラスメイト！
ビギニングノベルズ